

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12424

研究課題名（和文）多言語多文化共生に向けた協働型プロジェクト・ベースに基づく教員養成・研修の構築

研究課題名（英文）Construction of teacher education and development based on collaborative project-based training for multilingual and multicultural conviviality

研究代表者

半原 芳子（Yoshiko, Hambara）

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・准教授

研究者番号：00637811

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,500,000円

研究成果の概要（和文）：新型コロナウイルス感染症の影響により当初の計画の見直しを行い、本研究課題に取り組んだ。具体的には、研究方法を再検討し、「協働的学習支援プロジェクトのコーディネーターとしての省察と実践研究」及び「専門職の学習過程研究」を行った。その結果、これまでブラックボックスとなっていた実践者の力量形成過程を解明すること、さらにはカリキュラムの構築と実践者の力量形成過程の検討を連動させながら本研究を発展させる必要性があるとの知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在日本語教育分野では知識伝達型教育からの脱却が図られ、それに伴いカリキュラムの見直しや実践者の実践知に注目が集まりつつある。しかしながら、現状としてカリキュラム研究と教師教育研究は別領域として研究がなされている。本研究を通じ、両者は連動し合うものとして研究そのもののあり方を転換する必要があるとの知見が得られ、それを前提にした実践研究を研究期間中に開始できたことは学術的・社会的双方の意義がある。今後は個人が研鑽を積むためのカリキュラムからコミュニティ発展のためのカリキュラムへの転換も企図しながら、本研究の高度化に取り組みたい。

研究成果の概要（英文）：Due to the influence of COVID-19, the original plan was revised and this research was carried out. Specifically, I reexamined the research method and conducted "Reflection and Practice Research as a Coordinator of a Collaborative Learning Support Project" and "Research on the Learning Process of Professionals. As a result, I found that it is necessary to clarify the process of practitioners' competence development, which has been a black box, and furthermore, to develop this research by linking the construction of curriculum and the study of practitioners' competency development process.

研究分野：日本語教育

キーワード：多言語多文化共生 協働型プロジェクト・ベース 外国籍児童生徒 実践者の力量形成 事例研究

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の進展により、地域の学校において日本語を母語としない外国籍児童生徒が急増している。これまで日本の公教育は日本語を母語とする児童生徒の教育を中心に構成されてきたため、異なる言語文化を背景に持つ児童生徒の学習を支えることは新しくかつ困難な試みとなっている。外国籍児童生徒の教育のあり方に関する議論とあわせ、実践をベースにした新たな教員養成・教師研修のあり方も検討されている。研究代表者は、2014年から福井県の公立小・中学校にて外国籍児童生徒への協働的学習支援プロジェクトを行っている。同プロジェクトは福井大学の日本人学生と留学生がチームを組み、学校の教員と協力・連携しながら外国籍児童生徒に「教科・母語・日本語相互育成学習」(岡崎 1997)を行うものである。本研究では、同プロジェクトの組織的推進及び実践事例研究を進めることで、多言語多文化共生社会に向けた協働型プロジェクト・ベースの教員養成・研修カリキュラムの構築を目指す。

2. 研究の目的

多言語多文化共生社会に向けた協働型プロジェクト・ベースの教員養成・研修カリキュラムを構築し、社会に提示することが本研究の目的である。そのために、研究代表者が取り組みを進めている外国籍児童生徒への協働的学習支援プロジェクトを組織的に推進し、実践事例研究を行う。

3. 研究の方法

研究開始当初、次の三つを有機的に結びつけながら展開させていくことを計画していた。

- (1) 福井市・越前市の学校で進めている外国籍児童生徒への協働的学習支援プロジェクトを対象に、そこに参加する様々な専門家・支援者と実践を検討しながら詳細な事例研究を行う
- (2) 他地域の実践事例として、富山・長野・東京の教育委員会や学校、大学、NPOなどの市民団体における実地調査を行い、比較事例研究を進める
- (3) 上記(1)と(2)を通じ、地域の学校における外国籍児童生徒への協働的学習支援プロジェクトの事例分析に基づく支援者の実践的力量とその形成過程、及びそうした力量形成を支える組織を解明する

4. 研究成果

研究開始当時は福井市・越前市の複数の公立小・中学校にて協働的学習支援プロジェクトを実施していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により同プロジェクトの実施及び県外への調査がほとんど行えず、当初の計画の遂行が困難となった。そのため計画の見直しを行い、本研究課題に迫る別のアプローチとして、協働的学習支援プロジェクトのコーディネーター及び他の専門職(学校教育)の学習過程に着目した研究を進めた。

協働的学習支援プロジェクトのコーディネーターとしての省察と実践研究

多言語多文化共生社会に向けた協働型プロジェクト・ベースの教員養成・研修カリキュラムの構築を展望する際、そのカリキュラムの担い手となるコーディネーターの存在と力量形成はとりわけ重要となる。研究代表者は協働的学習支援プロジェクト開始当初より、コーディネーターとしてのふり返りとそのプロセスを吟味する実践記録の作成を積み重ねている。これまで作成した実践記録をもとに5年間の取り組みを省察し、コーディネーターとしての力量形成についての実践研究に取り組んだ(半原 2018, 2019)。

専門職の学習過程研究

省察的实践者の概念を提唱したドナルド・ショーンは、その著書のなかで多様な専門職の力量形成過程を明らかにしている。本研究はショーンを理論基盤とし、多言語多文化共生社会を支える専門職としての日本語教員養成・研修を展望するものであり、他の専門職の力量形成過程も比較研究として位置付けながら研究目的に迫りたいと考えた。具体的には、この間、日本語教育と近接する学校教育に注目し、教員研修留学生、そしてエジプト日本型学校の教員研修員の中長期に渡る学習過程を実践記録の分析から明らかにした(半原・モスタファ 2020, 半原・マグラブナン・王・モスタファ 2021)。

新型コロナウイルス感染症の影響により当初の計画を変更する必要性が生じたものの、そのことにより得られた知見があり、今後の課題も見えてきた。前者については、本研究が展望する多言語多文化共生社会に向けた協働型プロジェクト・ベースの教員養成・研修カリキュラムはコンテンツベースからコンピテンシーベースへの転換を企図するものであり、ゆえに専門職の知の形成を「行為の中の省察」(ショーン)に据え、これまでブラックボックスとなっていた実践者の力量形成過程を解明することが本研究の目的遂行のために必要不可欠であること、したが

って、カリキュラムの構築と実践者の力量形成過程の検討を連動させながら研究する必要性があるという知見である。現在、日本語教育分野では、知識伝達型教育からの脱却が図られ、カリキュラムの見直しや実践者の実践知についての研究が進みつつあるものの、カリキュラム研究と教師教育研究は別領域としてそれぞれで取り組まれている。両者は連動し合うものとして研究そのもののあり方を転換していく必要があり、本研究において、そのことを前提にした実践研究が開始できたことは学術的意義と社会的意義があると考えられる。今後の課題については、実践者の力量形成とカリキュラム構築を支えるコミュニティ及び組織の解明を視野に入れた研究を進めていくことである。本研究は、多言語多文化共生社会の実現を企図したものである。そのためには個人が研鑽を積むためのカリキュラムから、コミュニティ発展のためのカリキュラムへと明確な転換を図る必要があり、コミュニティ研究・組織研究にも取り組んでいかなければならない。本研究で得られた知見と課題を活かし、多言語多文化共生という新たな時代の専門職としての、そして省察的実践者としての日本語教員養成・研修の提案に向けた研究を今後も積み重ね、発信していきたい。

<引用文献>

- 岡崎敏雄 (1997) 「日本語・母語相互育成学習のねらい」, 『平成 8 年度外国人児童生徒指導資料』茨城県教育庁指導課, 1-7.
- 半原芳子 (2018) 「外国籍児童生徒への協働的学習支援プロジェクトを跡づける」, 『教師教育研究』11, 225-236.
- 半原芳子 (2019) 「福井の外国にルーツを持つ子どもたちへの協働的学習支援プロジェクトの展開 - コーディネーターとしての5年間をふり返る - 」, 『教師教育研究』12, 195-209.
- 半原芳子, モスタファ・ヤスミン・サーミー・ガマルエルディーン (2020) 「エジプト日本型学校の教師の力量形成と専門職学習コミュニティ」, 『教師教育研究』13, 357-377.
- 半原芳子, マグラブナン・ポリン・アンナ・テレーゼ・マラヤ, 王林鋒, モスタファ・ヤスミン (2021) 「教員研修留学生の長期に渡る学習のプロセスを辿る - ブータン人教師 Ugyen Dorji 氏の長期実践記録の分析から」, 『国際教育交流研究』5, 15-28.
- Schön, D. A. (1983). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. Basic Books. [柳沢昌一・三輪建二監訳 『省察的実践とは何か』鳳書房, 2007].
- Schön, D. A. (1987). *Educating the Reflective Practitioner: Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions*. Jossey-Bass. [柳沢昌一・村田晶子監訳 『省察的実践者の教育』鳳書房, 2017]

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 半原芳子, モスタファ・ヤスミン・サーミー・ガマルエルディーン	4. 巻 13
2. 論文標題 エジプト日本型学校の教師の力量形成と専門職学習コミュニティ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 357-377
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 半原芳子, マグラブナン・ボリン・アンナ・テレゼ・マラヤ, 王林鋒, モスタファ・ヤスミン	4. 巻 5
2. 論文標題 教員研修留学生の長期に渡る学習のプロセスを辿る - ブータン人教師Ugyen Dorji氏の長期実践記録の分析から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際教育交流	6. 最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 半原芳子	4. 巻 12
2. 論文標題 福井大学連合教職大学院における国際展開の自身の経験を跡づける - 2014～2019年の取り組みのなかで -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 115-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 半原芳子	4. 巻 12
2. 論文標題 福井の外国にルーツを持つ子どもたちへの協働的学習支援プロジェクトの展開 - コーディネーターとしての5年間を振り返る -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 195-209
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 半原芳子	4. 巻 11
2. 論文標題 外国籍児童生徒への協働的学習支援プロジェクトを跡づける	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 225-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 半原芳子	4. 巻 3
2. 論文標題 2018年度日本語教育学会北陸支部活動企画をふり返る 専門職としての日本語教師の成長を支える実践記録	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際教育交流研究	6. 最初と最後の頁 31-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 Yoshiko HANBARA, Pauline Anne Therese MANGULABNAN
2. 発表標題 Designing Models for International Collaborative Inquiry through Reflective Practice Records: Case of a Bhutanese Science Teacher Trainee's Learning Programme in Fukui, Japan
3. 学会等名 6th International Symposium on New Issues in Teacher Education ISNITE
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 王林鋒・半原芳子・稲葉敦
2. 発表標題 省察的実践力を育む国際連携の構築と実践 - 国際教育実習・海外教員研修の受け入れ事例 -
3. 学会等名 日本教師教育学会第29回研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------